

## 月曜寸言

去る四月二十九日に北京で起つたソ連大使館爆破事件は、「天安門事変」以後の複雑怪奇な状況のなかでしか起り得ない事件であったような気がする。

清朗節に起つた驚天動地の「天安門事変」以来、ちょうど一カ月がすぎたが、天安門前広場という、毛沢東中国の「聖地」で起つた数方〜数十万の規模の「大衆反乱」であっただけに、この未曾有の事件が党中央に与えた衝撃にははかりしれないものがあつたことについては、これまでにも本欄でふれた。この事件を即座に「反革命事件」と

断じた党中央は、現行憲法および党規約上の所定の手続きも経ずに、事件二日後、鄧小平のあらゆる職務を解任し、現行党規約にもその規定のない「党第一副主席」というポストを明示し

て新首相の華國鋒をその地位につけたのだが、こうした経緯の

夫人が主役を演じて、一連の事態の背後の彼女の存在をいやがらうえにも浮かびあがらせたが、こうなると、いよいよ「しうけ」てこざるを得ないのでないか。

それというのも、今回の「天安門事変」の最大のポイントは

## すり替えられた本質

中島信雄

なかにも、衝撃の大きさが反映していた。党中央の決定が出てから、それを支持する官製デモや各級各分野の決議も出揃ったけれども、やはり一種の「しら

文革新派への痛烈な批判、とくに江青批判が目立ったことであつたからである。「人民日報」は

鄧小平擁護のスローガンはほとんど自立せず、もっぱら「毛澤東の哀悼と追慕の情の噴出であつたのが事実だ」と

ソ連大使館爆破事件という怪奇な出来事も、この大衆の不満と相契的であるように思われてならない。

(東京外語大助教授)